

組合からの“発信”



大阪木材工場団地協同組合
理事長 山谷 吉良

「年頭のご挨拶」

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

皆様方におかれましては、ご家族おそろいで新しい年をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

新しい年が明けましても、国内外の問題が山積し、我が国経済も景気の先行き不安と不透明さが依然、根強く残り企業経営にはまだまだ予断を許さない厳しい状況が続いております。

しかしながら、当協同組合では、堺市と美原町との合併後、工場団地内のインフラ整備が着実にすすみ、工場団地の開発時から運営して参りました団地内企業と隣接住宅地の汚水処理事業は、長年の課題でありました堺市への全面移管がようやく実現する運びとなり、公共下水道化が目前となったことを感慨深く感じております。

振り返りますと、ここ木材団地は山と畑と溜め池ばかりの所でございました。この場所を「あたらしき大地」と名付け、造成工事から工場建設をスタートして40数年が経過することになります。この間、当工場団地の内外を取り巻く環境も大きく変化し、木材単一業種から多くの優秀な異業種企業にも加入いただき、時代の変化に適応した工場団地運営に全力を挙げて取り組んでまいりました。お陰さまで、現在では、団地内に約120社余の企業が立地し、周辺には多くの商業施設が誘致され一つの街として機能し、全国的にも有数の工場団地として発展することができました。これもひとえに工場団地の礎を築かれた先人たちのご尽力の賜物と深い感謝の念にたえません。創立50周年の節目の年を来年に控え、当協同組合では「創立50周年記念事業プロジェクト」を立ち上げ、様々な記念事業を進めていく予定ですが、開発から現在まで木材団地に関わっていただいた皆様と歩んできた50年を祝し、また新たなスタートをきる機会にしたいと考えております。

今後も、定着いたしました「木材団地」のブランドマークを維持し、会員企業のメンバーシップを強化しながら、各社の企業活動の活力向上にむけた工場団地としての一体的活性化の取り組みを推進し、先人の方々から引き継がれた大切な資産を次代に繋げ、更なる工場団地の発展のために、役職員一同努力して参る所存でございます。

最後になりますが、本年も、皆様には一層のご支援、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。



C O N T E N T S

- 組合からの“発信”年頭のご挨拶P1
- 新春特集P2
- 組合からの情報発信基地P3~4
- 組合員企業の紹介P5~6
- 木のある暮らしP7
- こだわりスポット・みはらトピックスP8
- 毎日の健康なくらしP9
- コラム 新春お年玉クイズP10

新春特集

新年にあたり、今後、日本の外交上の重要な存在と考えられている東南アジアとの関わりをテーマに、東南アジアの国々と交流が深い「堺国際交流協会」の加藤均理事長にご寄稿いただきました。



特定非営利活動法人
堺国際交流協会
理事長 加藤 均



「東南アジアと堺」

現在東南アジアは、アセアン(東南アジア諸国連合)という共同体として大きな存在感を示している。アセアン加盟十カ国の総人口は約6億7千万で、今後の成長が大いに期待されている。欧州連合(EU)の人口が約5億ということを考えるとそれもうなずける話だ。人的・自然資源の豊富さや異文化を取り入れる国際性と柔軟性は、経済的な面のみならず様々な分野で世界のリーダー的な存在になることを予感させる。

堺にとって東南アジアは大変つながりが深い地域だ。時代をさかのぼること数百年、堺が南蛮貿易の中心地として栄えていた中世の時代、多くの堺の人々が大海原を越えて世界へ漕ぎ出していった。東南アジアとは琉球を経由して交易が行われ、人的交流の足跡も残されている。

例えば、世界遺産として有名なカンボジアのアンコールワットに残された「日本堺」という墨書。これは、17世紀の始めに堺の住人がこのアンコールワットを祇園精舎と信じ、その柱に書き残したといわれている。昨年4月に私自身もその文字を実際に見る機会に恵まれ、感慨深いものがあった。

また、ベトナムの中部の町ホイアンには、堺商人の墓が残され四百年の昔から今日まで地元の人々に護られている。その子孫の具足武さんは、現在も堺にお住まいである。このほかにも、まだまだ検証されていない堺と東南アジアのつながりは多くあるだろう。

私が主宰する堺国際交流協会は、こういったつながりの深い東南アジアの国々との活動を行っている。市制施行120周年を記念して2009年に始まった「堺・アセアンウィーク」では実行委員会のメンバーとして、その開催にかかわることができた。

堺国際交流協会が特に力を入れているのが、教育・文化的活動で、ベトナムのダナン大学とは学術交流協定を結んでいる。それというのも、将来の日本と東南アジアとの関係において最も大切なのは、相互の文化を知り、その橋渡しとなる人材の育成だと考えるからである。

これまで、日本と東南アジアの関係は「援助するもの」と「援助されるもの」という構図で理解されることが多かった。しかし、これからは「相互に学び合うもの」として複雑化する国際社会でよきパートナーとなっていこう。古の時代から深いつながりがある堺が、そのパートナーシップの拠点となり様々な情報を日本全国にそしてアセアン諸国に発信することができるならば、はるばる海を渡り山を越えた何百年も前の堺の人々の苦勞も報われるのではないかと考えている。